

邪馬台国所在地論争の不毛に終止符を — 邪馬台国畿内説を嗤う —

秋月耀

始めに

本稿は、「邪馬台国」の位置論について、従来顧みられることのなかった権力と軍事の視点から考察することを目的としている。

日本の古代史の研究では、「邪馬台国」の位置論—「邪馬台国」がどこにあるのか—を避けるわけにはいかない。大和王権の成立過程との関係が問題となる。「邪馬台国」研究では、『魏志倭人伝』がバイブルとも目され、位置論では、専ら、専ら、「邪馬台国」にいたる行程に記述されている地名の比定・あてはめの議論は、里程・方角が曖昧であるため、百家争鳴、いずれも隔靴搔痒、決定打に欠け、正鵠を射るには程遠い。

本来、歴史研究の基本は、当時の人々が、どのような状況の下で、どのように考え、どのように行動したのか、就中、国家・民族等の集団を率いる権力者・指導者達の意志を追究することが何よりも求められる。その際、古今東西、政治権力を体現し、国家・民族・その他集団の消長を決するものは、最終的には軍事力である。古代においても、歴史の実相に迫る絶対不可欠の要件は、戦国時代や幕末・明治維新と同様である。

近時、斯界の「邪馬台国」論では、『魏志倭人伝』の記述と土器等の考古資料との相互検証が盛況である。ところが、『魏志倭人伝』についても、その編纂の背景の事情、即ち、三国時代当時の魏と呉との北東アジアをめぐる相克、「倭国」「邪馬台国」の戦略的な価値、魏王朝内の権力闘争における曹操一族と司馬懿の立場等は、全く議論されていないに等しい。

「邪馬台国」の「卑弥呼」の時代、北東アジア地域は、漢帝国の崩壊、三国鼎立、魏・呉の相克、そして、魏王朝内において熾烈な闘争が展開された。戦闘と大量殺戮が常態化した「生きるか死ぬか」「殺すか殺されるか」の時代であった。

このような権力と軍事の視点が欠落している見解の典型が、斯界で有力されている「邪馬台国」畿内(大和)説であると言える。

『魏志倭人伝』には、魏と「邪馬台国」相互の使節派遣、特に、魏から「倭国」に派遣された使節について記述されている。彼等の目的や役割は、当時の情勢を最も如実に反映しているとともに、「邪馬台国」の位置論にも直結し、決定的な意味を有する。

権力と軍事の視点からは、魏からの使節の問題は、「邪馬台国」畿内(大和)説と両立する余地はない。

1. 「邪馬台国」の時代背景—三国時代の北東アジア情勢と『魏志倭人伝』

「邪馬台国」の位置についての議論は、専ら『魏志倭人伝』の里程等についての記述を根拠としている。このため、「邪馬台国」の位置を考察にあたり、『魏志倭人伝』が編纂された背景を検証することは欠かせない。

そこで、本稿では、始めに、『魏志倭人伝』が編纂された背景、当時の北東アジア地域等を概観したい。

(1)大陸北東部の情勢

先ず、『魏志倭人伝』が編纂された当時の三国時代の北東アジア地域と魏王朝内外の情勢を概観したい。

当時の中国大陆は、その長い歴史の中でも最も混乱した三国時代であった。後漢王朝は、折からの異常気象を背景に、黄巾の乱等の反乱、異民族の侵入により滅亡し、三国が鼎立した。当時、大規模な戦闘と殺戮が常態化し、人口が十分の一に激減したとも言われる。それ以降、隋・唐の再統一までの4百年近く、大陸の分裂混乱は続いた。



〔卑弥呼の外交戦略 古代の歴史より〕

このような当時の複雑かつ峻烈な北東アジア地域の情勢と、これを背景に、魏・呉の相克、そして、魏王朝内において熾烈な闘争が展開された事実は、「邪馬台国」を論ずるに当たって、不可欠な前提条件である。

魏と「邪馬台国」相互の使節派遣、特に、魏から「倭国」に派遣された使者をめぐる事情は、このような三国時代の北東アジアの激動を最も如実に反映し、それ故に、「邪馬台国」の所在地の問題に直結し、畿内説は否定される。

大陸北東部の公孫氏をめぐる魏・呉の相克

2世紀後半以降、後漢の混乱・衰退にともない、大陸北東部では、それまで漢に抑えられていた、いわゆる東夷各族の動きも活発となった。

三国時代、魏は中原を制し優勢であったが、南西の蜀、南方の魏に加え、呉、蜀ともに、魏の後方を攪乱、牽制すべく高句麗、匈奴等の異民族との連携を図り、魏は南北挟撃の脅威にさらされ、厳しい戦略環境の下にあった。

大陸北東部は、魏と呉との対立の第二戦線の様相を呈した。

さらに、2世紀後半、漢の大陸北東部の地方官であった公孫度(189年遼東太守)は、混乱に乗じて、遼東地方に独立の動きを進めた。その嫡子・公孫淵は、北方諸族の鮮卑等と軍事同盟を結び、また、海路を通じて呉と盟約した。

他方、江南に拠った呉の孫権は、蜀の諸葛亮による対魏北伐(227年～)に乗じ、遼東の公孫氏や高句麗との連携により魏を挟撃する戦略を進めた。そして、呉は、3度(228, 229, 232年)遼東に使節を派遣した。

この間の魏・呉・公孫氏・高句麗の動きは、次のように複雑かつ熾烈であった。

189年、漢の地方官・公孫度は遼東太守に任命された。228年、公孫淵(孫)は、228年、魏から遼東太守に任命された。公孫淵は魏からの独立を図り、呉に使者を連年派遣した。

229年、呉の孫権は、公孫淵に正式な使者を送り独立を促した。これに対し、公孫淵は呉への服属を申し出、魏を南北から挟撃することを提案した。呉は、さらに、海上にも盟友を求め、230年、今日の台湾と見做されている夷州にも派兵した。

232年、呉は再度公孫氏に対して使節を派遣した。当時、魏は、諸葛亮率いる蜀軍と対峙していたが、遼東征討軍を派遣した。これに対し、公孫淵は、折しも遣使してきた呉と結ぶことに決した。魏は高句麗と結び、撤退した。

233年、孫権は遼東に、兵一万を伴う大規模な燕王封建の使節団を派遣した。魏は再度、公孫淵を遼東太守に任命した。公孫淵は魏への再服属を決断し、呉使を斬り、その首を魏に送った。

この際、呉から公孫氏に派遣され使節団の一部は高句麗に逃れ、彼等を保護した高句麗王は、帰国に使者を随行させた。234年、これを受け、呉・孫権は、高句麗王に「单于」の称号を与えるべく使者を派遣した。ところが、高句麗王は魏への服属を決意し、翌235年、孫権が再度高句麗に派遣した使者は斬られ、魏に首を届けられた。

236年、公孫淵は、再度、魏に反旗を翻し独立を図り、237年、自ら燕王と称し、再び呉に盟約を求めた。公孫淵は、さらに、魏の北方の鮮卑と結んだ。呉は公孫淵に燕王の称号を与えた。

魏の公孫氏討滅

このように、魏は、蜀の諸葛亮と対峙し、厳しい状況が続いた。だが、234年、諸葛亮が陣没し、魏の苦境は好転し始めた。

そこで、238年2月、魏(明帝)は、公孫氏討伐を決定し、周到な準備の下、公孫氏討滅作戦を遂行した。

先ず、高句麗と連携し、高句麗は数千人の軍を率いて公孫氏・燕を攻撃した。同時に秘密裏に海を渡り、公孫氏の任命した帯方・楽浪両郡の官吏に帰順工作を行い、公孫氏の後方を遮断した。この過程で、当時公孫氏に服属していた近隣諸族に魏への帰服を促した。

その上で、238年6月、満を持して、司馬懿が大軍を率いて出陣した。同年8月、遼東の公孫氏・燕は完全に包囲され、迅速に殲滅された。この際、殲滅戦を展開し七千人を抹殺、「京観」を築いた。

ところが、同年12月7日、魏の明帝は病臥し、翌238年1月に急逝した。これに伴い、魏では新帝(8歳)が即位するとともに、先帝への喪に服した。呉軍はこの機に乗じて、同年3月、遼東に侵攻し、多数の捕虜を拉致・連行した。

魏による公孫氏討滅

189年～	公孫度、後漢により遼東太守に任命、その後、後漢から自立、遼東半島を実質的に支配
204年	公孫康、楽浪郡(現在の平壤)の南部に帯方郡を設置(三国志韓伝:韓・倭は帯方に帰属と記述)
220年～	後漢滅亡、魏・呉・蜀の三国時代
236年	公孫淵、燕王を自称
237年(景初元年)7月	魏(武将・毋丘儉)、公孫氏を攻撃(撤収)
237年(景初元年)7月	魏・明帝、大船建造を命令
238年(景初二年)正月	魏・明帝、司馬懿に遼東出兵を命令
時期不明	魏、密かに楽浪郡・帯方郡を攻撃、平定
238年(景初二年)6月	魏・司馬懿、遼東に到達
238年(景初二年)6月	倭国女王・卑弥呼、魏に遣使
238年(景初二年)8月	魏・司馬懿、公孫氏滅亡
239年(景初三年)正月	魏・明帝死去

公孫氏討滅後の魏の対東夷戦略

三国時代の当初、魏は、南西の蜀、南の呉に対抗せざるを得ず、公孫氏が背反した際も、東夷各族に対して懐柔策をとった。

238年、東夷各族は、魏の公孫氏への討伐戦争に際して、味方側に立った。高句麗は数千名の援軍を派遣した。帯方太守らが順調に楽浪・帯方二郡を回復したことにも、おそらく韓人が支援した結果と見られる。

しかし、魏は、公孫氏を討滅した後、10年をかけ、まず懐柔策、次に威圧策をとり、東夷各族を屈服させた。

242年以降、東夷諸族が魏の統治に反抗し始めると、武力威圧策に転換した。244年から46年、東夷諸族の反攻に対して容赦なく弾圧を行った。

244年高句麗の都を撃滅し、245年再び高句麗を討伐し、以後高句麗は弱体化した。高句麗の属国(沃沮、挹婁等)も魏に帰服した。

さらに、高句麗と、その属国を平定した後、245年、矛先を韓人に転じた。この戦いは極めて激烈で、結局帯方郡の太守が戦死したが、ついに韓は滅ぼされた。

その後、263年、魏は蜀を滅ぼし、265年に魏を継いだ西晋は、280年呉を滅ぼし、大陸は再統一された。朝鮮半島の不安定な情勢も、ほぼ沈静化し、楽浪・帯方郡の周辺が安定化に向かった。この時期、東夷諸国が度々西晋に来朝した。

(2)『魏志倭人伝』編纂の背景

このように厳しい内外情勢のもとで、『魏志倭人伝』が編纂された背景を検証することも欠かせない。

『魏志倭人伝』(『三国志』中の「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称)は、この三国時代と近接した年代に編纂され、「邪馬台国」について、中国の王朝正史としては異例なほど詳細具体的に記述されている。したがって、従来の「邪馬台国」論は、この『魏志倭人伝』の解釈を基本とし、これを抜きに論ずることはありえない。

だが、同時に、編纂当時の次のような事情についても、留意することが求められる。

司馬懿の功績

魏は三国鼎立を優勢に進めた。司馬懿は、曹操亡き後の魏王朝の下、頭角を現し、王朝の中枢で、曹操の一族との熾烈な権力闘争に勝ち抜いた。また、司馬懿は、魏が展開した一連の軍事作戦の殆どに、総指揮官として前線に出陣した。蜀の諸葛孔明と五丈原で対峙した故事は有名である。孔明の陣没の後、司馬懿は最高指揮官として、後顧の憂いを断つため、遼東の公孫氏を討滅し、楽浪・帯方郡を回復した。司馬懿の功績は極めて大きい。

司馬懿の一族は、魏の皇帝(曹操の一族)から禅譲を受け、新たに晋王朝を樹立した。晋の代に、短期間ながら、大陸は再統一された。司馬懿は晋の事実上の創始者であり、三国時代の真の勝利者は司馬懿・仲達であるとも言える。

陳寿の立場

『魏志倭人伝』は、この司馬懿一族の晋王朝の下、陳寿によって、編纂された。司馬一族の晋王朝から『三国志』の編纂を命じられた陳寿は、蜀の吏員であり、父は、司馬懿を苦しめた敵将・諸葛孔明の幕僚であった。陳寿が、晋の正当性と晋の事実上の始祖である司馬懿の功績について記述するにあたって、一語一句に至るまで最大限の配慮を払ったことは疑いない。陳寿にとっては、文字通りの命懸けであった。

『魏志倭人伝』は、この新王朝・晋の下で、編纂された正史・『魏志』の一部である。大陸では、統一王朝の成立に伴い、『史記』以下の正史『二十四史』が編纂され、王朝毎に先の王朝の

事績が編纂された。正史は、あくまで、編纂時の政治状況を背景に、新たな王朝が帝位を篡奪する易姓革命を正当化することを本来の目的として、先の王朝の事績が記録される公的な政治文書である。また、周辺諸国に関する記述も、中華・華夷思想に基づいて記述されていることも当然である。したがって、この限りでは、記述には誇張・潤色は必然であり、金科玉条視し、鵜呑みにすべきものとは言えない。他方、王朝篡奪等に直接関係しない限り、全くの誇張・捏造と見做し史料価値を否定する合理的理由も見出し難い。

「倭国(邪馬台国)」の女王「卑弥呼」は、この公孫氏討滅と期を一にして朝献・遣使した。「倭国」が、このタイミングで朝貢したことは、魏にとっては戦略上死活的に重要であった。と同時に、この事実は、司馬懿が権力闘争を勝ち抜く上で大きく寄与し、さらに、魏から帝位を篡奪し、晋を成立させた司馬一族にとっては、司馬懿の徳と晋王朝への禅譲との正当性を誇示する象徴ともなった。

また、後述するように、司馬懿の政敵(曹真)が尽力し、中央アジアの「大月氏国」(クシャーナ朝)の特使が朝見し金印「親魏大月氏王」を贈られた。司馬懿の功績を誇示するため、「邪馬台国」が「大月氏国」より遠方であるとする必要であった。

『魏志倭人伝』における「邪馬台国」の記述についても、同様な両極端の見解が存在する。だが、いずれも、このような事情を考慮すれば、合理的とはいえない。

2. 魏から「倭国」に派遣された使節

魏から「邪馬台国」に派遣された特使は、権力と軍事の視点を踏まえれば、「邪馬台国」の位置論争に終止符を打つ上で、決定的な意味を有する。

『魏志倭人伝』には、概要次のような、「倭国」と魏が派遣した使節の状況が記述されている。

※

○は「倭国」、●は魏からの使者

①景初2年(238年)6月倭国女王、大夫・難升米と次使・都市牛利を帯方郡に派遣し、天子に拝謁を願い出、帯方太守・劉夏は彼らを都に送り、使者は男の生口4人と女の生口6人、布2匹2条を献上。

同年12月、魏皇帝、女王を親魏倭王とし、金印紫綬を授けるとともに銅鏡100枚等を下賜。難升米を率善中郎将、牛利を率善校尉に。

①正始元年(240年)帯方太守・弓遵、建中校尉梯儁らに詔書と印綬を持たせ倭国へ派遣し、倭王の位を假授するとともに下賜品を授与。

②正始4年(243年)12月、女王倭彌呼、大夫伊聲耆、掖邪狗らを魏に使者として派遣し、生口と布を献上。魏皇帝(斉王)は掖邪狗らを率善中郎将に。

③正始8年(247年)、女王、帯方郡太守・王頎に載斯烏越を使者として派遣し、狗奴国との戦いについて報告。

②帯方郡太守、塞曹掾史・張政らを倭国に派遣。

④女王に就いた壹与は、帰任する張政に、掖邪狗ら20人を同行させ、掖邪狗らはそのまま都に向かい男女の生口30人と白珠5,000孔、青大句珠2枚、異文の雑錦20匹を献上。

魏王朝が「倭国」に、2度にわたる使者、特に、2度目の塞曹掾史・張政一行を派遣した事実には、当時北東アジア地域の軍事情勢や魏と呉の軍事戦略、さらに、魏王朝内の権力闘争等の極めて重要な論点が内包されている。

魏から「倭国」に派遣された使者が、何を目的に、どのように来訪し、何をしたのかについては、従来、殆ど論じられていない。この問題が何故重要なのか、何が問題なのかについて考察したい。

(1)魏から「倭国」に派遣された1回目の使節ー建中校尉・梯儁

240年、魏は「倭国」に使節を派遣した。238年に「倭国女王・卑弥呼」が使者を派遣し朝貢したことに応えたものであった。

「正始元年(240年)太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國拜假倭王并齎詔賜金帛錦罽刀鏡采物倭王因使上表答謝詔恩」

(正始元年、太守の弓遵、建中校尉の梯儁等を遣はし、詔書・印綬を奉じて倭國に詣らしめ、倭王に拝假す。ならびに詔を齎し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因りて上表し、詔恩に答謝す。)

1回目の使節の目的・任務

この使節は、大陸の皇帝から東夷諸国に初めて派遣されたものであり、もちろん、皇帝の金印と銅鏡その他の多数の下賜品を携えていた。

だが、平時のような友好親善、あるいは、単なる外交儀礼だけを目的としたものではない。何よりも、当時、呉は台湾や遼東方面に度々出兵し、脅威は健在であった。まかり間違えても、皇帝からの金印等が、宿敵の呉あるいは他の東夷に奪われるなどという事態は絶対に許されるものではない。

さらに、相手側の「倭国」は、魏に背き討伐された公孫氏が設置した帯方郡とは、緊密な関係にあった。

『三国志』(魏書 烏丸鮮卑東夷伝 韓・馬韓の条)によれば、後漢の末期(2世紀末-3世紀前葉)、漢の地方官であった公孫氏が朝鮮半島北部に帯方郡(204～313年)を設置した。当時、半島の「倭人」は、韓民族等と同様、公孫氏に服属し、帯方郡の直接支配下にくみこまれた。

『魏志韓伝・馬韓』

「桓靈之末 韓濊疆盛郡縣不能制 民多流入韓國 建安中 公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡 遣公孫模張敞等 收集遺民興兵伐韓濊 舊民稍出 是後倭韓遂屬帶方」

「桓靈の末、韓濊強盛にして、郡県は制する能はず。民は韓国に流入すること多し。建安(196-220年)中、公孫康は、屯有県以南の荒地を分ち、帶方郡と爲す。公孫模、張敞等を遣はし、遺民を収集して兵を興し、韓濊を伐つ。旧民はやうやく出づ。この後、倭、韓は遂に帶方に属す。」

当時既に存在していた北九州の「倭国」が、この「倭人」に含まれるかは不明ではあが、『魏志倭人伝』によれば、公孫氏の時代、日本列島の「倭国」には、帶方郡の使節がしばしば往来し、さらに、「伊都国」には郡使などの往来に際しての宿泊・迎賓用の施設もあった。帶方郡の官吏が「伊都国」に常駐したとも見られる。

公孫氏の帶方郡と密接であったことは明らかであった。

『魏志倭人伝』

「王遣使詣京都帶方郡諸韓国及郡使倭国皆臨津搜露」

(王が使を遣はし、京都、帶方郡、諸韓国、及び郡使が倭国に詣るに、皆、津に臨みて搜露す。)

「東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千餘戸世有王皆統屬女王國郡使往來常所駐」

(東南のかた陸行五百里にして、伊都國に至る。官を爾支と曰い、副を泄謨觚、柄渠觚と曰う。千余戸有り。世王有るも皆女王國に統属す。郡使の往来して常に駐まる所なり。)

魏は、このような状況から、「倭国」の事情を当然把握していたと見られる。当時は戦時であり、実際、呉が公孫氏に使節団を派遣した際、公孫氏は裏切り、呉の使節を抹殺した。この後、魏が再建した帶方郡の太守は韓族の反乱により戦死した。

さらに、この使節が威力偵察的な軍事的色彩を帯びていたことも明らかと言える。呉と死闘を繰り広げていた魏にとって、北九州地域の戦略的価値は、制海権の確保等、戦略上の要衝として、はかり知れない。

端的に言えば、「倭国」が対呉戦略上頼りになりうるか、その実態と実力を直接確認することが喫緊の課題であった。

1回目の使節の規模と態様

このような背景は、この使節の規模と態様に直結する。魏及び直接の当事者である帯方郡の太守の立場からすれば、皇帝の命により使節を「倭国」に派遣する以上、弁解、言い逃れは許されない。

魏側が事前の情報収集等準備万端であったことは当然である。当時の対外行動には、平時の儀礼的訪問であっても、相当数の部隊を伴うことは常識である。まして、当時の緊迫した周辺情勢を踏まえれば、この使節団が自力で防衛しうる態勢を確保することは絶対的条件である。まして、少数の使節ということもあり得ず、相当な規模であることも常識である。

幾つかの参考事例を挙げれば、

後世、『日本書紀』によれば、白村江の戦いの後(671年11月)、唐帝国の使者が捕虜を返還すために来航した。戦闘状態は解除され、戦時とは言えないが、緊張状態は続いていたと見られる。唐側は、総勢47隻・2000人の陣容であった。

「(天智十年 671)十一月 (略)『唐国の使人郭務悰等六百人・送使沙宅孫登等一千四百人、総合べて二千人、四十七隻に乗船して、俱に比智嶋に泊りて、(略)』

さらに、遙か後世の太平の世、明・清代の皇帝が琉球国王を任命する冊封使の一行は500名前後であった。なお、江戸時代、朝鮮通信使の一行は500名前後であったが、これに対馬藩からの案内、さらに、警護1500人程が加わった。

この使節の規模について、大人数で来る必要がない、来られる筈がない、来るはずがない、受け入れるはずがない、軍事的色彩などない等々の諸説が見られるが、一般社会常識にも悖る妄論であり、論外である。魏を支えた曹操一族や司馬懿を甘く見てはならない。

(2)魏から「倭国」に派遣された2回目の使節－塞曹掾史・張政

247年、魏は「倭国」に塞曹掾史の張政を派遣した。同年、「倭女王・卑弥呼」が使者を帯方郡に派遣し、「狗奴国」王と交戦中である旨報告したことに応えたものであった。魏による東夷諸族の征圧が終結し、後任の帯方郡太守が着任した直後であったが、新任の帯方郡・太守は、これに対応して、直ちに、塞曹掾史の張政を派遣した。

「其八年太守王頌到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡相攻撃狀遣塞曹掾史張政等因齎詔書黃幢拜假難升米爲檄告之」

(その八年(247年)、太守の王頌 官に到る。倭の女王たる卑弥呼、狗奴國の男王たる卑弥弓呼と素より和せず。倭の載斯・烏越等を遣はして郡に詣り、相攻撃する状を説かしむ。

塞曹掾史張政等を遣わし、因って詔書・黄幢をもたらし、難升米に拝仮せしめ、檄をつくりてこれを告諭す。)

呉の影

呉は三度遼東に遣使し、魏の東北部・遼東で反旗を翻した公孫氏に燕王の称号を与え、今日の台湾と見做されている夷州にも派兵した。

魏の戦略目的は、このような呉に対抗するため、北九州地域を確保することに尽きる。魏は、「狗奴国」が「倭国」に攻撃を仕掛けた事態に、「狗奴国」が呉を後ろ楯とし、戦略の要衝である「倭国」が所在する北九州地域を征圧することを危惧した。

呉と「倭国」が公的に交渉を行った文献は存在しない。『三国志・呉書』には、編纂時の事情から、当然ながら、全く記述されていない。だが、北九州以外の地では、次のような、呉の年号を記す画文帯神獸鏡が二面、紀年の明記されていないものが一面出土している。

- ・山梨県(市川三郷町)の鳥居原塚古墳から出土(「赤烏元年(238 年)」の紀年銘)
- ・兵庫県宝塚市の安倉古墳から出土(赤烏七年(244 年)の紀年銘)
- ・熊本県球磨郡あさぎり町の才園古墳から出土

これらの銅鏡は全て古墳時代の遺跡から出土し、数百年伝世したものであるが、呉との一定の公的な関係なしに日本列島に伝わる可能性は低く、呉と「倭人」さらには「倭国」との関係を示唆している。

魏の戦略

当時、東アジア情勢は大きく転換していた。魏は、従前、東夷各族に対して、懐柔策をとっていた。だが、諸葛亮死後の蜀の弱体化を踏まえ、242年以降、容赦ない武力威圧策に転じた。245年、高句麗と高句麗に服属する諸族を数度にわたり討伐し服属させた。その後さらに韓人を討伐し、帯方郡太守が戦死するほどの激戦の末、制圧した。

このように、247 年になると、情勢は大きく転換した。高句麗は敗れ、その属国も既に帰順し、韓は討滅された。戦死した帯方太守の後任も、既に着任し、魏は、戦略的関心を、半島方面から、北九州方面へ振り向け、日本列島に本格的に関与することができる状況となった。

魏の立場に立てば、対呉戦略を最優先にする以上、重要なのは、あくまで、北九州の地理的位置であり、「倭人」「倭国」まして「邪馬台国」の存続自体ではない。「倭国」が北九州に存在する以上は、魏にとって戦略的価値の対象であり、「邪馬台国」が「倭国」の一部である限り同様である。

したがって、魏の目的は「倭国」との友好親善ではない。

「倭国」に対する政策の選択肢は、「倭国」の体制を盤石なものとして冊封体制下に組み込むか、あるいは、半島と同様に戦略拠点として直接支配するかであった。

即ち、この地の「倭国」勢力が役に立つ限りは勢力圏に組み込み、必要であれば、相応の支援を行う。その具体例が張政の派遣である。

そうでない場合、北九州地域の戦略的価値は変わらないものの、「倭国」そのものの戦略的価値はないと見做される。そして、この地域を戦略拠点として確保するための方策が追求される。また、「倭国」が魏の意向に反する場合、まして、呉との連携を策する場合は言うまでもない。弱小で頼りにならない場合も同様と言える。

他方、「倭国」が北九州から遠隔地にある場合、最早、「倭国」には戦略的価値はないが、北九州地域を半島における楽浪・半島郡と同様の扱いとすることも選択肢に入る。これは戦略の定石であり、古今東西共通の常識である。

「倭国」側が、公孫氏、高句麗、韓族等をめぐる魏・呉の苛烈な軍事行動を目のあたりにして、政治的・軍事的圧力、さらに、存亡に直結する危機感を抱いたことは当然である。

このような魏の軍事戦略を端的に示す記述が『晋書』に見られる。『晋書』には、司馬一族が魏王朝から帝位を篡奪して樹立した(西)晋の事績が記述されている。

この『晋書』には、東夷諸国が度々西晋に來朝した状況が記述されているが、「倭国」に関する記述は266年の1回だけに留まる。この事実は、三国時代の終結したことに伴い、北九州の戦略的重要性が低下し、最早、「倭国」を優遇する戦略的必要性がなくなったことを如実に示している。

『晋書』(西晋『武帝紀』)

266年

「泰始二年十一月己卯 倭人來獻方物 并園丘・方丘於南・北郊 二至之祀合於二郊」

(泰始二年、十一月己卯月(5日)、倭人來たりて方物(特産物)を獻ず。円丘方丘を南北郊に併せ、二至(冬至と夏至)の祀りを二郊に合わす)

278年「(咸寧)四年、東夷六國來獻」

280年「(太康)元年、六月甲申、東夷十國歸化。秋七月、東夷二十國朝獻」

281年「二年、東夷五國朝獻」

289年「十年、是歲、東夷絶遠三十餘國、西南二十餘國來獻」

290年「太熙元年二月辛丑、東夷七國朝貢」

東晋『孝武帝紀』

382年「(太元)七年九月、東夷五國遣使來貢方」

2回目の使節・塞曹掾史・張政の目的

大陸王朝が「夷狄(東夷)」の内紛などに逐一介入することはしない。しかし、魏は「夷狄(東夷)」の国内争乱にもかかわらず、「倭国」の内紛に直接介入することに決し、皇帝の命令(勅令)により塞曹掾史・張政を派遣した。

この塞曹掾史・張政の使節団一行の派遣は、三国時代という苛烈な戦乱の時代における軍事的行動であり、平時の物見遊山を兼ねた友好親善・外交儀礼を目的とした使節などではない。

先ず、押さえるべきは、魏の帯方郡太守が派遣した塞曹掾史の重要任務は、辺境諸族の鎮撫である。その上、彼を派遣した帯方郡太守・王頎は、高句麗征伐でも戦功をあげた歴戦の人物である。塞曹掾史・張政を辺境の小役人・中間管理職・閑職と見做す見解は、初歩的・基礎的事実を歪曲した根拠のない安直なものであり、判断を誤る。

そこで、この論点については、何よりも、中国の専門家の見解を直接引用し、紹介したい。

「張政使節団は明らかに軍事的性質を持っていたのである。張政は塞曹掾史である。古代に役所が祖父と称せられ、塞曹は辺境事務管掌の役所であり、辺境事務局である。そして掾史は、太守の委任したある部門の事務を分担する属吏である。したがって、塞曹掾史は太守を助けて辺境事務を管掌する官吏であり、あるいは辺境事務局の責任者であると言ってもよい。

塞曹掾史の重要な職掌の一つは、たぶん辺境各族の鎮撫であろうか。この故に、各族の状況を熟知し、軍事のこともわかり、外交手腕も優れた人が担当するのである。それは、朝廷の任命した官ではないので、官爵は高くないが、太守の選抜した側近者であるため、地位が非常に重要である。

こうして、匈奴国との戦争への関与を旨とする使節団ーこれが太守代表の臨機処置の権力を持っていた軍事使節団ーが塞曹掾史によって率いられたのはまさに最適だったといえよう。」(沈仁安『中国から見た日本の古代』2003.11.30)

2回目の使節団の規模

戦時の当時、裏切りと戦いが常態化していた。儀礼的訪問であつても相当数の部隊を伴う。まして、張政の派遣は単なる「倭国」激励に留まらぬ軍事行動であり、実態は、少なくとも、軍事顧問(団)である。その上、呉の介入も想定されることを踏まえれば、当然、相当規模の武装部隊を伴う。

ちなみに、『三国志・呉志』によれば、江南の呉は、230年、夷洲と亶洲に兵1万を派遣し、また、233年、遼東に兵1万を派遣した。ちなみに、戦国時代-三国時代、将軍が率いる平時の兵員数は約3000人以上との説も見られる。

そもそも、部隊行動における文字通りの死活問題は、武器の補充に加えて、食糧等必需品の補給、即ち、いわゆる兵站を維持・確保することに尽きる。この魏氏の場合、極めて緊張した戦時下であること、「倭国」内で兵站を確保することは危険であり、至難である。朝鮮半島と北九州地域に相当の支援基盤を確保しない限り不可能に近い。

さらに、当然、外洋航海に適した大型船を使用していた。この間も、複数の大型船が帯方郡との間を往復し、北九州の港湾に常駐することは軍事の常識である。16世紀末に豊臣秀吉が発動した文禄・慶長の役で明らかである。

このような魏使の位置づけと規模は上陸地点に関連する。
魏使の上陸した地点は、博多湾と唐津湾とする見解が見られる。
唐津湾説の論拠として、当時の地形から、「博多湾」自体の水深がそれほど深くなかったことから、大型の構造船の入港は不可能であったことが指摘される。また、王都「邪馬壹国」に至近の戦略の要衝である博多湾を避けて誘導したとされる。



漢代の楼船

【孫光圻：「中国古代航海史」】

だが、今まで考察してきたように、魏にとって、戦略上の必要に迫られた行動であり、そのような事情は十分に承知し精査した上で、大規模な使節団を派遣することに決したと見るべきである。このような見解は、魏の使者の任務を捨象した場合にのみ成り立つ。

なお、この問題は、後述するように、「倭国・邪馬台国」の位置(所在地)の問題に直結する。

「狗奴国」の行方

張政一行は「詔書黄幢を齎し」「檄を為してこれを告諭」したとされ、その後の「狗奴国」については全く記述されていない。

「遣塞曹掾史張政等因齎詔書黄幢拜假難升米爲檄告之」

(塞曹掾史の張政等を遣はして、因りて詔書・黄幢をもたらし、難升米に拝仮し、檄をつくりてこれに告諭す。)

通説では、朝貢国の要請・懇願に応じ、仲介役として、黄幢(黄色い軍旗)を渡し和解するよう諭し、その結果、概ね、「狗奴国」との戦闘は沈静化したと解されている。

しかし、彼等の任務は、魏にとっての戦略的脅威である呉の拠点、軍事力を以て、無害化し取り除くことであり、仲介役として黄幢を渡し和解するよう諭すような生半可なものではない。魏にとって、対呉戦略上の要衝の地である北九州を押さえる「倭国」に敵対する狗奴国との戦いを沈静化するとは、要するに狗奴国の戦力を排除すること、即ち、殲滅することである。

当時の「狗奴国」は鉄の生産では北九州を凌ぐとの見解も見られる。しかし、歴戦の最新装備の魏の軍団に対しては鎧袖一触で殲滅され、再起不能となったことは確実である。

この問題についても、前述と同様に、中国本国の専門家の見解を直接引用し、紹介したい。
「要するに日本の学者は、女王国と狗奴国間の戦争の東夷全体の中での意味をほとんど軽視しているように思える。」

(略)

したがって、魏のこの戦争に対する絶え間ない措置は、中郎将への爵位の授与から軍旗の賜与、軍事使節団の派遣まで軍事的色彩がますます強烈になっていった。とりわけ最後の場合、東夷各族の反乱が徹底的に鎮圧された状況下、倭人の間での戦争が依然として終わらず、魏はこの混乱の状態の継続を明らかに認めるわけにはいかなかった

このため一旦韓を滅ぼした後、すぐに間接的に関与する方式に改め、強力な軍事使節団を倭に赴かせ直接関与させることで、一挙に倭人の間の戦乱を平定してしまったのである。

古代中日両国の関係史上、中国の王朝が使者を遣わして直接倭人の内政に干渉したのは、この時以外にはない。塞曹掾史張政の、女王国と狗奴国との戦争に対する軍事的関与は、幽州刺史・毌丘儉が高句麗をおおいに破ったこと、帯方太守弓遵らが兵を起こして韓を滅ぼしたこととは、反抗に対する鎮圧の方式だけが異なっていて、本質的には特に区別があったわけではない。」(同上)

この問題も、後述するように、「倭国・邪馬台国」の位置(所在地)の問題に直結する。

「倭国」の内戦

「倭国」では、「狗奴国」との戦闘が収束した後、「女王・卑弥呼」の後継をめぐる内戦が勃発し千余人が死亡したとされる。

「卑弥呼以死大作冢徑百餘歩狗葬者奴碑百餘人更立男王國中不服更相誅殺當時殺千餘人復立卑弥呼宗女壹與年十三爲王國中遂定政等以檄告」

(卑弥呼以に死す。大いに冢を作る。徑百余歩、徇葬する者 奴婢百余人なり。更めて男王を立つるも、國中服せず。更更相誅殺し、時に当たりて千余人を殺す。)

それでは、この内乱に臨み、魏の特使張政一行はどのように対応したのか。

この内戦で千余人が死亡したことが事実であれば、中世以前の日本列島では最大規模の殺戮を伴う戦闘であり、当時の武器体系や戦闘の様相を前提にすれば、短期間に終息する可能性は低い。実際、「卑弥呼」が共立された以前の「倭国乱」の場合には、相当長期間続いたとされる。

倭国の内乱が勃発したのが、彼らの滞在中であった場合はもちろんのこと、彼らが撤収中あるいは撤収後の場合であっても、帯方郡に帰還することなどは許されない。いずれの場合でも、帰還せず、「倭国」に滞在したことになる。つまり、皇帝の勅令により派遣された魏の軍事顧問団の下、相当規模の武装部隊が、相当期間、「倭国」に駐留したことを意味する。

魏にとって、「倭国」が親魏倭王に任じた冊封体制下の臣属国であるのみならず、北九州地域は呉に対する軍事戦略上の要衝である。本来、張政の任務は、単に「倭人」間の争乱を平定することだけでない。

要するに、この地域が呉の影響下あるいは支配下になることを阻止することである。そもそも、魏が「東夷」の内紛に介入した前例はない。したがって、「邪馬台国」と「狗奴国」との戦闘が終息しただけでは、任務を全うしたことにはならない。公孫氏と帯方郡の前例を見れば明らかである。張政一行が、この間、拱手傍觀し局外中立であることは許されない。軍事的に介入することは当然であった。

彼等がこの内戦に介入し、後継の「倭国」新女王の後ろ盾となり、「倭国」の安定に決定的に関与した可能性は極めて高い。

『魏志倭人伝』は一切触れていない。正に、春秋の筆法を彷彿とさせる。

「壺与」の擁立

結局、「卑弥呼」の宗女「壺与」(13歳)を王に立て、内乱は終息し、張政は「檄を以て壺与を告諭」した。

「復立卑彌呼宗女壹與年十三爲王國中遂定政等以檄告」

(また卑弥呼の宗女壺与年十三なるを立てて王となし、國中遂に定まる。政等、檄を以て壺与を告諭す。)

この内戦が終息した後、「卑弥呼」の後継として「倭国王」に就いた「壺与」は、魏の一行を送り、「倭国」としては未曾有の貢物を献じた。

「壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還因詣臺獻上男女生口三十人貢白珠五千孔青大句珠二枚異文雜錦二十四」

(壺与、倭の大夫たる率善中郎將の掖邪狗等二十人を遣はして、政等の還るを送らしむ。因りて台に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大句珠二枚・異文雜錦二十四を貢ぐ。)

この間の経緯を、当時の国際情勢と政治的軍事的観点から見れば、先ず「倭人」間、即ち、「倭国」乃至「邪馬台国」と「狗奴国」と間で戦闘が勃発し、「卑弥呼」は魏に助けを求め、魏は直ちに介入し、終息した。

次に、「卑弥呼」の後継をめぐり、「倭国」内で内戦が生起し、魏の介入により沈静化した。

魏は、壺与を盛り立てて、内乱を平定し、「倭国」の安定に決定的に関与した。

要するに、「倭国」は完全に魏帝国の冊封体制下の臣属国であり、女王「卑弥呼」は、「倭人」間の争いに際し、宗主国・魏の介入を要請した。魏は、直ちに介入し、さらに、その後継者を擁立した。これは、国際常識からすれば、壺与は魏の傀儡であり、「倭国」は魏の傀儡政権化したということになる。

この『魏志倭人伝』に記述された魏の武装部隊を伴う使節団の問題に論及している日本の専門家の見解は、驚くほど少ない。従前の、中国の文献に対する研究が乏しい時代はとにかく、最近においても同様と思われる。

その中では、次の見解は、筆者の知る限りは、殆ど唯一、正に白眉、正鵠を射ていると言える。

「247年には、魏の援助を期待する情報の使節が、帯方郡へおもむいて、さらに戦闘が激化していることを告げた。そこでようやく魏の役人である張政らが、詔書と黄幢とをもって渡来してくるのである。張政らは、ただの使節ではない。軍事顧問団でもあって、檄文を作って告諭し、作戦を指導した形跡が、濃厚である。女治の背後に、女王を取り巻く軍事力と、魏との通交による外的権威があったことも見失うわけにはいかない」(上田正昭『大和朝廷』1995.8.10 第1刷)

他方、例えば、次のような有力な見解も見られる。当時の中国大陆と朝鮮半島が三国時代という想像を絶するような戦乱と殺戮の時代であったという基本認識と国際常識が全く欠如している典型と言える。

「247(魏・正始8)年、邪馬台国は匈奴国と戦闘状態に入った。卑弥呼からその報告を受けた帯方郡の太守の王頎は、属官の張政というものを邪馬台国につかわし、卑弥呼の重臣の難升米に詔書と黄幢をさずけ、さらに「告諭」した。卑弥呼を支持することは明らかにしたのである。このような帯方郡のバックアップにもかかわらず、卑弥呼はその後もなく死んだ。」(直木孝次郎『日本古代国家の成立』1996.12.10)

「『魏志』倭人伝による限り、魏は倭国に二度エールを送り、それ以後、倭国の軍事紛争に対して何らかの行動なり意思表示なりを起こした形跡が認められない」

「中国が第二次倭国大乱(卑弥呼死後の内乱)に干渉できなかったのは、ひとえに中国内部の目まぐるしい紛争のためであり、極東の島国の内紛にかまっていられるほど、中国は政治的に安定しなかったといえよう。・・・魏王朝は第二次倭国大乱に干渉を加えたくても、それができないような状況にあった。魏志倭人伝の叙述が第二次倭国大乱のさなかで終わっているのは、このような中国情勢と決しての関係なのだろう。」

(遠山美都男『卑弥呼誕生』2011.11.21初版)

この問題は、「邪馬台国」の位置のみならず、大和王権成立の過程に重大な問題を提起している。

(2)「倭国女王・卑弥呼」から魏に派遣された使者

『魏志倭人伝』によれば、「倭国」から魏に5回使節を派遣した。最初の遣使が派遣された時期については、景初2年(238年)説と景初3年(239年)説とが対立する。この問題には、魏・呉を

めぐる北東アジアの軍事情勢と魏王朝内の司馬懿の立場から考察することが必須である。

景初二年説

238年6月、反旗を翻した遼東の公孫氏を追討するため、魏の大軍が公孫氏の拠る遼東を包囲し、総指揮官の司馬懿が着陣した。この時、正に、期を一にして、「倭女王」は帯方郡に使者を派遣した。同年12月、使者は魏都・洛陽で、魏の皇帝(明帝)から詔書を受けた。

魏の公孫氏討伐戦は周到かつ徹底的であった。その戦略目標は公孫淵の退路を断つことであり、そのために、司馬懿が大軍を率いて着陣するまでに、奇襲により楽浪・帯方二郡を直接攻略し、籠城した公孫氏は完全に包囲された。魏側は、公孫氏を包囲するに先立ち、これを孤立させるため、事前に、周囲の東夷諸族に鎮撫工作を行い、楽浪・帯方郡も工作により攻略した。

司馬懿が出陣したのは4月であり、二郡を密かに攻略したのはそれ以前、遅くとも3月と見られる。司馬懿は6月に着陣し、2カ月後の8月には公孫氏は殲滅された。

6月、「倭女王」の使節・難升米等が帯方郡に到着した。この時期は、正に、司馬懿による公孫氏包囲の最中であった。だが、このような戦況から、周辺地域も戦場とはなっていない。このため、238年8月には、朝鮮半島・遼東と魏都との交通も再開された。

したがって、この時期に、「倭女王」の使節・難升米等が帯方郡に到着し、魏軍の下で、帯方郡経由、魏都・洛陽に到達することには何ら支障はない。

魏による公孫氏討滅

189 年～	公孫度、後漢により遼東太守に任命、その後、後漢から自立、遼東半島を実質的に支配
204 年	公孫康、楽浪郡(現在の平壤)の南部に帯方郡を設置(三国志韓伝:韓・倭は帯方に帰属と記述)
220 年～	後漢滅亡、魏・呉・蜀の三国時代
236 年	公孫淵、燕王を自称
237 年(景初元年)7 月	魏(武将・毌丘儉)、公孫氏を攻撃(撤収)
237 年(景初元年)7 月	魏・明帝、大船建造を命令
238 年(景初二年)正月	魏・明帝、司馬懿に遼東出兵を命令
時期不明	魏、密かに楽浪郡・帯方郡を攻撃、平定
238 年(景初二年)6 月	魏・司馬懿、遼東に到達
238 年(景初二年)6 月	倭国女王・卑弥呼、魏に遣使
238 年(景初二年)8 月	魏・司馬懿、公孫氏滅亡
239 年(景初三年)正月	魏・明帝死去

このように、「倭国」の朝献・遣使は、これ以上はあり得ないと言えるほどの絶妙な時期に迅速に行われた。

魏・司馬懿側は、公孫氏を包囲するに先立ち、これを孤立させるため、周囲の東夷諸族に鎮

撫工作を行った。当時、朝鮮半島には多く居住していたと見られる「倭人」も、例外ではない。まして、また、「倭国」は、従前、魏に背き討伐された公孫氏が設置した帯方郡と緊密な関係にあった。

このような状況から、この景初2年6月の「倭国女王」からの遣使は、「倭国」独自の判断というよりむしろ、魏(帯方郡・司馬懿)の指喉の結果である可能性が高い。

なお、この時の「倭国女王」からの献上品は、後の壹興の場合は勿論、前例である後漢に対する倭國王帥升の場合に比較し、余りに見劣りがし、明らかに非礼である。このことから、この使節は急遽派遣されたものであり、景初2年の根拠とする説も見られる。また、司馬懿側の強い意向に基づくものとする説も見られる。

※

倭國王・帥升」合(117年):生口 160 人

倭国女王・卑弥呼」:男の生口 4 人、女の生口 6 人、班布 2 匹 2 丈

倭国女王・壹興」:男女の生口 30 人と白珠 5000 孔、青大句珠 2 枚、異文の雜錦 20 匹

景初三年説

多数説は、景初三年(239年)とし、その概要は、次のようなものである。

帯方郡への遣使が景初2年(238年)6月であれば、まさに、この6月に、司馬懿の大軍が遼東に着陣し、公孫淵討伐戦が開始された最中となる。遼東から半島地域は凄惨な戦場であり、遣使どころではない。

また、明帝は、景初三年(239年)1月に他界したことから、前年の景初2年(238年)12月には重篤であったはずである。爾後は、新帝の即位、先帝への服喪等が続き、魏は非常事態下である。景初二年(238年)説では、「倭国」の使者が、このような非常時にもかかわらず、6月に帯方郡に、12月に魏都・洛陽に到着したことになる。魏が東夷の「倭人」を受け入れることは、余りに非常識であり、あり得ない。

さらに、翌景初3年3月には、呉軍が、魏・明帝の急逝し、幼帝(8歳)の即位という時期を狙い遼東に侵攻し、守将軍を撃ち、捕虜を連れ帰った。したがって、この年の6月は、この地域は呉軍の制海権下にあり、「倭国」が帯方郡に遣使し、さらに魏都・洛陽に赴くことは非現実的である。

しかし、この説は非現実的である。

景初3年(239年)3月には、呉軍が、魏・明帝の急逝し、幼帝(8歳)の即位という時期を狙い遼東に侵攻し、守将軍を撃ち、捕虜を連れ帰った。したがって、この年の6月は、この地域は呉軍の制海権下にあり、「倭国」が帯方郡に遣使し、さらに魏都・洛陽に赴くことはありえない。

さらに、前述したような司馬懿の立場も考慮すべきである。司馬懿は、魏王朝で勲功を重ね、

蜀の諸葛孔明と対峙し、公孫氏討伐のため遼東に遠征し凱旋した。ところが、その直後の景初2年(238年)12月、魏の明帝が病臥し、翌3年(239年)初、急逝した。そして、その直後、内政は全面的に曹氏一族が掌握し、司馬懿は遠ざけられた。

したがって、「倭国」の朝献が景初3年であれば、これは司馬懿ではなく曹一族の功績となる。ようするに、この景初3年説は、司馬懿一族が樹立した晋の時代に、陳寿が、わざわざ司馬懿の政敵・曹氏一族の功績を記述したということであり、絶対にありえない。

魏王朝からも、「倭国」に対し、2度使者が派遣されている。この問題については、次の章以降で、改めて考察したい。

3. 「邪馬台国」の位置

従来、「邪馬台国」の位置論は、『魏志倭人伝』と土器、鏡等の考古資料を基本としている。

『魏志倭人伝』では、専ら、記述された里程や方位が論議されてきたが、最も本質的な論点、即ち、『魏志倭人伝』が編纂された経緯や背景と当時の国際情勢や軍事戦略等に関する視点が抜け落ちている。

それ故、今まで考察してきたように、編者・陳寿と司馬懿をめぐる事情、そして、三国時代当時の大陸北東部をめぐる軍事情勢や魏と呉の戦略を考慮することなく、「邪馬台国」の位置を論ずることは殆ど意味がない。

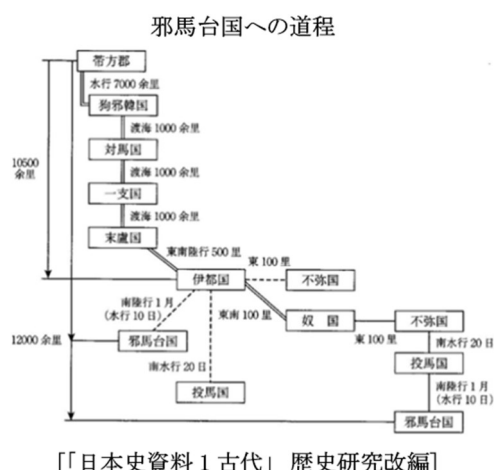
特に、魏使の目的と役割・任務、さらに態様や規模、さらには、移動の状況等は、「邪馬台国」の位置(所在地)の問題に直結する。それ故、これらを看過した「邪馬台国」論争では、隔靴搔痒、正鵠を射るには程遠い。

そこで、一部重複するが、改めて、「邪馬台国」の所在地について、考察したい。

「邪馬台国」への行程

『倭人伝』の編纂に関して考慮すべきは、陳寿と司馬懿をめぐる前述のような事情である。

晋王朝から『三国志』の編纂を命じられた陳寿は蜀の人であった。晋の正当性と晋の事実上の始祖である司馬懿の功績について記述するにあたって、一語一句に至るまで最大限の配慮を払ったことは疑いない。陳寿にとっては、忖度どころか、命懸けであった。このような事情が『倭人伝』の記述振りに直接投影されていると見做すことが合理的と言える。



このような『魏志倭人伝』が編纂された事情に基づけば、帯方郡から「邪馬台国」へ行程の記述について次のように考えられる。

まず、当時の、大陸王朝の理念と世界観に基づく、遠方の夷狄が皇帝の徳を慕って朝貢するという理念を踏まえ、「邪馬台国」への里程を設定している。

※

起点の帯方郡から「伊都国」までの里程が一万五百余里とされ、それ以降が突然「水行」「陸行」という表記に変化しながら、女王国から郡までが一万二千余里と明示されている。

次に、後漢末(229年)、中央アジアの「大月氏国」(クシャーナ朝)の特使が朝見し、金印「親魏大月氏王」を贈られた。この実現には司馬懿の政敵(曹真)が尽力した。したがって、司馬懿の功績を誇示するためには、「邪馬台国」が「大月氏国」より遠方であることが必要であった。

※

漢都・洛陽～「大月氏国」:1万6千里

漢都・洛陽～楽浪郡(5千里)+帯方郡～

「邪馬台国」(1万2千里)>1万7千里

このような東夷の中で最も遠方にいる「倭人」が朝献遣使して来たことは、後漢・光武帝以来百数十年ぶりのことであり、魏の明帝にとっては、明帝自身の徳の高さと魏の正当性を内外に示す絶好の機会であった。「倭国」の使節は、魏から破格の厚遇を受け、「卑弥呼」は「親魏倭王」の金印を授与され、銅鏡100枚等を下賜された。

同時に、公孫氏討滅と期を一にしたタイミングで「倭国」が朝貢した事実は、魏にとって「倭国」の地理的位置と動向が戦略上死活的に重要であることから、外交戦略上の大成果であった。

そして、何よりも、司馬懿にとっての大きな功績となり、司馬懿が権力闘争を勝ち抜く上で大きく寄与した。

(3)「邪馬台国」の位置

それでは、「邪馬台国」の位置は何处であろうか。

「邪馬台国」は、今まで累次提示してきたような軍事戦略的視点に基づき考察した場合、北九州以外の地ではあり得ないと言える。

「邪馬台国」の所在地は北九州地域に限定される

『魏志倭人伝』の記述に基づけば、「邪馬台国」の所在地を想定するにあたり、次のような事実

魏と大月氏国・邪馬台国の地理関係



[金澤正由樹:「古代史サイエンス2」]

を踏まえることが必須である。

即ち、

当時は戦乱と殺戮の常態化した三国時代であり、北東アジア地域も、魏と呉との第二戦線であった。

魏にとって北九州地域とここに所在する「倭国」は戦略の要衝であり、魏は、この「倭国」の混乱と危機にあたり、魏の対呉戦略の危機と見做し、武装部隊を伴う使節団を派遣し、本格的に介入した。

以上から、『魏志倭人伝』の「邪馬台国」の所在地は、北九州に限定される。

邪馬台国が北九州の「倭国」ではない地域に存在したと立論する場合には、本稿で最優先としてきた軍事戦略的視点を全て否定することができることを証明しなければならない。

要するに、三国時代の熾烈な権力闘争、戦闘と殺戮等の事実や魏により派遣された特使・張政等の軍事的役割の全てを否定する新たな見解を提示しなければならない。しかし、これらは厳然たる史実であり、つまりは、歴史を否定するものである。

ところが、従来の「邪馬台国」所在地論には、このような視点が全く欠落している。最近の例を紹介したい。

「黒塚古墳の位置する大和東南部は、ホケノ山古墳や箸墓古墳をはじめとする古墳出現期の大方前方後円墳が集中していることから、初期倭政権の中枢部と考えられている。画紋帯神獣鏡につづいて、三角縁神獣鏡がこの地域から多数出土したことにより、前方後円墳の規格とともに政権が政治体制を表彰するものとしてそれを分配したことが確実となった。『魏志』倭人伝に記録する邪馬台国と考古学から復元できる倭政権とが、ここに一連のものとして理解できるようになったのである。」(白石太一郎『日本の時代史1倭国誕生』2002.6.10 初版)

「こうした考古学的研究成果を積み重ねていくと邪馬台国の所在地は近畿地方となってくる。また、すでに述べた魏の邪馬台国に関する地理観から考えると、九州から離れた近畿地方の方が有力となる」(吉村武彦『ヤマト王権・シリーズ日本古代史②』2010.11.19 初版)

「すなわち倭人伝の道程に関する偏向を考慮すれば、邪馬台国は大和にある可能性が高いと言えよう。不弥国から投馬国の間が「水行二十」と「水行」だけで表記されていることも、それを瀬戸内海や日本海に当てはめれば違和感はない」

「伊都国に置かれた「大率」を「刺史」と表現したのは、伊都国が首都圏に属さないためである。すなわち、邪馬台国が九州にはないことが文献解釈から証明できるのである。」

「邪馬台国に派遣された使者には大率が刺史のように遠方の北九州諸国の監察をしていると理解できたのであろう」(渡邊義浩『魏志倭人伝の謎を解く』2012.12.25 初版)

「邪馬台国」畿内説

斯界では、邪馬台国が畿内地方、特に、大和の纏向にあったとする「畿内説」も有力とされている。そこで、何故、畿内説が否定されるのかについて、重複を省みず、改めて敷衍したい。

畿内説の根拠として、次のような事柄が挙げられている。

桜井市にある巻向遺跡や箸墓古墳の存在している。

奈良盆地には初期の前方後円墳が多く集まっている。

奈良盆地には三角縁神獣鏡が数多く出土している。

纏向遺跡で卑弥呼が生存していた時期のものと思われる桃の種が出土している。

邪馬台国と大和政権の名称が似ている。

大和朝廷の有力者の古墳が築かれ始めた3世紀半ばは、ちょうど卑弥呼が亡くなったとされる時期と合致している。

だが、これらの見解によっては、本稿で提起した国際情勢と軍事戦略等の論点をクリアすることはできない。特に、『魏志倭人伝』に記述された、二度にわたり派遣された魏の使節団について、例えば、次のような論点に対する具体的かつ明確な見解を提示することが求められる。

二度にわたり派遣された魏の使節団は、彼等は、帯方郡から近畿地方の大和まで、どのような手段で、どのような経路で到達し、そして、どこに滞在し、何をしていたのか。

魏・呉双方にとっての軍事戦略上の要衝であった北九州地域はどのような位置づけであったのか。また、どのように対応したのか。

これに対して、次のような見解もみられる。が、これらも、歴史研究以前の一般社会常識にも悖り、論外である。

魏の使者は、「卑弥呼」の居所である「邪馬台国」が所在した畿内・大和には到達していない（「卑弥呼」に会っていない）。

魏皇帝からの「親魏倭王」の金印や下賜品は、直接届けていない。

これらについては、このような

要するに、畿内説は、当時の時代背景などを全て否定しない限り、明確な見解を提示することは不可能であり、その致命的な欠陥は、歴史研究としての基本的視点が欠落していることに尽きる。

さらに、次のような見解も見られるが、この見解も、問題の本質を全く外れている。

畿内には纏向遺跡と箸墓古墳があるが、他の地域には、このようなメルクマールとなるべき遺跡が見つかっていない

この問題は、遺跡の有無・大小・多寡とは全く関係ない。極論すれば、纏向や箸墓で「親魏倭王」の金印が見つかったとしても同じである。

要するに、権力と軍事力という歴史研究の基本的な視点に立脚すれば、魏王朝が使節を派遣した、「倭国」の「卑弥呼」が都とした「邪馬台国」が、遠隔の辺地である畿内に存在したということとは絶対にありえない。この説は、当時の「卑弥呼」や魏王朝を支えた曹操や司馬懿の一族の生き様を愚弄するに等しい。

大和王権は魏の傀儡政権か

何よりも、畿内説において、決して看過することができない決定的な論点は、前述した『魏志倭人伝』の次の一説との関係である

「復立卑弥呼宗女壹與年十三爲王國中遂定政等以檄告」

(また卑弥呼の宗女壹与年十三なるを立てて王となし、國中遂に定まる。政等、檄を以て壹与を告諭す。)

この『魏志倭人伝』の記述によれば、壹与が王位についた際、魏の使者である張政は、少なくとも、説諭し、さらに、「倭国」内の内乱の収束や壹与の王位に積極的に干渉・介入した可能性も高い

しかし、「邪馬台国」が大和に所在したのであれば、大和王権との何らかの一体制・連続性を認めることになり、「卑弥呼」は大和王権の始祖であると位置づけられる。そうであれば、その後継者の「壹与」も当然大和王権に位置づけられる。

したがって、畿内説を唱道する見解は、いずれにせよ、魏の使者である張政が「壹与」の王位に介入したということは、大和王権の成立、あるいは、その直近の首長の地位に関与していたことを認めるものである。これは要するに、壹与の「邪馬台国」、即ち、初期の大和王権は、成立にあたり魏の影響力が極めて強いということ、さらには、魏王朝の直接軍事介入により成立した、極論すれば、魏王朝の傀儡政権に近いことを示している。

畿内説の論者は、この極めて重要な論点について明確な見解を提示することが求められる。このような立論がありえないことは明らかである。

低湿地・纏向

なお、本稿の趣旨からは外れるが、「邪馬台国」畿内説によれば、大和の纏向地域が「倭国(邪馬台国)」女王・卑弥呼も王宮が存在した地であり、大和王権発祥の地である。この説では、纏向で発掘された大型建物跡を王宮の跡と見做している。

しかし、この立論は、正に、軍事の初歩的な常識と権力者や指導者の発想とは無縁の極めて安易・安直な発想である。何故、古今東西、このような低湿地で防衛体制の全く取られていないような王宮や王都が存在しないのかを考察すべきである。蘇我氏が甘樫丘に邸宅を造営した理由を考えれば明らかである。

終わりに―「邪馬台国」論争を噛む

「邪馬台国」について考察するにあたり、基本とすべき資料が『魏志倭人伝』であることは言うまでもない。本稿を締めくくるにあたり、今後、「邪馬台国」・『魏志倭人伝』の研究を進める上での基本的な論点や問題点を改めて提示したい。

先ず何よりも、歴史研究に共通する基本的な視点・認識を確認することが必要である。古代史の研究においても、国家・民族等の集団を率いる指導者あるいは権力者としての立場と意志を把握するように努め、その上で、政治、外交、軍事関係等について考察し検証することが絶対不可欠の要件となる。

「邪馬台国」当時は、三国時代であり、混乱と戦乱が続き、大量殺戮が常態化していた。指導者・権力者にとって最優先すべきは自己と集団の生存であり、命がけであった。曹操や司馬仲達の思考や行動は、市井の傍目八目的な安直・安易な発想では到底及ばない。

正に、

「歴史とは、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話である。」(E. H. Carr)

「兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也」(孫子)

「戦争とは他の手段をもってする政治の継続である」(C.V. Clausewitz)

「鉄砲から政権が生まれる」(毛沢東)

その最たるものが、本稿で強調した、魏が「邪馬台国」に塞曹掾史・張政等を派遣した問題である。斯界で展開されてきた数多の「邪馬台国」の位置論は、この問題については、看過・閑却・等閑視・放擲している以上、全くの的外れな議論が繰り返されるのみであり、時間と労力の無駄にすぎない。まして、「邪馬台国」畿内(大和・纏向)説などは、「絵に描いた餅」「砂上樓閣」「机上の空論」にすぎず、自己満足で、意味がない。未だに有力説であること自体が異様である。

「卑弥呼」達は、この時代を生き抜いた。「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と哄笑されてはならない。

次に、本来、『魏志倭人伝』を基本とする以上、本場・中国の専門家の見解を尊重すべきであり、少なくとも、耳を傾けるべきである。

筆者が中国の専門家の論考に触れる機会は極めて限られているが、それでも、筆者の知り得る限りでは、基本的に、これらの事項を十分に踏まえた上で展開され、説得力に富んでいる。

だが、日本の斯界では、このような例は寡聞にして知らない。そもそも論及すらされていない。殆どの場合、自己流、恣意的に解釈するばかりで、日本における斯界の通説・定説と本場・中国の専門家の見解とは全く相違する場合が余りに多い。

このような斯界の現状は、学問の世界の国際標準と本場の専門家から見れば、滑稽であるとか言いようがない。そろそろ、日本でしか通用しないような議論の土壌からは脱却すべき時であろう。

その最も端的な例が「邪馬台国」を研究する上でのバイブル的存在となっている『魏志倭人伝』の文言解釈のあり方と言える。

『魏志倭人伝』は、そもそも、あくまで中国語の古典であり、原文は当時の言葉(漢語)であるが、我々が馴染んでいる漢文は日本語である。原文を正確に読むためには、段落、句読点等が使用されていないこと等から、中国古典文学の約束事、先行文献等を的確に把握することが肝要である。現状では、2千文字程の漢字の文章で、本場と斯界とでは句読点に100カ所近くの食い違いが生じている。

具体的には、例えば、「卑弥呼」の死についての記述「卑弥呼以死」は、少なからず「以て卑弥呼死す」と解されている。しかし、「卑弥呼以死」の前に、何らの理由も述べずに、突然、「卑弥呼」以て死すという表現法は、素人の文章でない限り、考えられない。この「以」は「已」の同音同義語で、「すでに」の意味である。つまり、張政が倭国についた時には、「卑弥呼」は既に他界していたことを言わんとしている。これは訓読みによる全くの間違いとなる。

そうであれば、「卑弥呼」の自死、賜死、さらには、日食、呪い、鎮魂のための大型墳墓築造等は、正に砂上の楼閣、一瞬にして瓦解する。

外国(語)の文献資料を研究する場合、その言語を母語とする専門家の見解を尊重し、教えるを受けることは学問の初歩的な鉄則であり、『魏志倭人伝』の場合も基本である。

主な参考文献

直木孝次郎「日本古代国家の成立」「倭国の誕生」
白石太一郎「倭国誕生」
上田正昭「大和朝廷」
大津透「神話から歴史へ」
安本美典「邪馬台国への道」
寺沢薫「王権誕生」「卑弥呼とヤマト王権」「最新邪馬台国事情」
関川尚功「考古学から見た邪馬台国大和説」
武光誠「邪馬台国と大和朝廷」「古代日本誕生」「九州水軍国家の興亡」「水軍国家ヤマトの誕生」
遠山美都男「卑弥呼誕生」
都出比呂志「古代国家はいつ成立したか」
渡邊義浩「魏志倭人伝の謎を解く」
金澤正由樹「古代史サイエンス」「古代史サイエンス2」
金田弘之「軍事から見た邪馬台国の軌跡」
豊田有恒「歴史から消された邪馬台国の謎」
NHK スペシャル取材班「新・古代史」
謝銘仁「邪馬台国中国人はこう読む」
王金林「古代の日本」「邪馬台国と古代中国」
沈仁安「中国から見た日本の古代」
孫栄健「邪馬台国の全解決」